（二〇一二年度）

8 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は21ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、携帯電話・ＰＨＳの電源は切ること。
三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、筆記具は、**ＨかＦかＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
十、試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

由来ぼくの最も嫌いなものは、善意と純情との二つにつきる。

考えてみると、およそ世の中に、善意の善人ほど始末に困るものはないのである。ぼく自身の記憶からいっても、ぼくは善意、純情の善人から、思わぬ迷惑をかけられた苦い経験は数限りなくあるが、聡明(そうめい)な悪人から苦杯を嘗(な)めさせられた覚えは、かえってほとんどないからである。[1]悪人というものは、ぼくにとっては案外始末のよい、付き合い易い人間なのだ。という意味は、悪人というのは概して聡明な人間に決っているし、それに悪というもの自体に、なるほど現象的には無限の変化を示しているかもしらぬが、本質的には自らにして基本的グラマーとでもいうべきものがあるからである。悪は決して無法でない。そこでまずぼくの方で、彼らの悪のグラマーを一応心得てさえいれば、決して彼らは無軌道に、下手な剣術使いのような手では打ってこない。むしろ多くの場合、彼らは彼らのグラマーが相手によっても心得られていると気づけば、その相手に対しては仕掛けをしないのが常のようである。

[2]それにひきかえ、善意、純情の犯す悪ほど困ったものはない。第一に退屈である。さらに最もいけないのは、彼らはただその動機が善意であるというだけの理由で、一切の責任は解除されるものとでも考えているらしい。

かりにぼくがある不当の迷惑を蒙(こうむ)ったと仮定する。開き直って詰問すると、彼らはさも待っていましたとでもいわんばかりに、切々、咄々(とつとつ)としてその善意を語り、純情を披瀝(ひれき)する。驚いたことに、途端にぼくは、結果であるところの不当な被害を、黙々として忍ばなければならぬばかりか、おまけに底知れぬ彼らの善意に対し、逆にぼくは深く一揖(いちゆう)して、深甚な感謝をさえ示さなければならぬという、まことに[3]奇怪な義務を負っていることを発見する。[4]驚くべき錦の御旗なのだ。もしそれ純情にいたっては、世には人間四十を過ぎ、五十を越え、なおかつその小児の如き純情を売り物にしているという、不思議な人物さえ現にいるのだ。だが、四十を越えた純情などというのは、ぼくにはほとんど精神的奇形(モーロン)としか思えないのである。

それにしても世上、なんと善意、純情の売り物の夥(おびただ)しいことか。ひそかに思うに、ぼくはオセロとともに天国にあるのは、

その退屈さ加減を想像しただけでもたまらぬが、それに反してイアゴーとともにある地獄の日々は、それこそ最も新鮮な、尽きることを知らぬ知的エンジョイメントの連続なのではあるまいか。

善意から起る近所迷惑の最も悪い点は一にその無法さにある。無文法（ノー・グラマー）にある。警戒の手が利かぬのだ。悪人における始末のよさは、彼らのゲームにルールがあること、したがって、ルールにしたがって警戒をさえしていれば、彼らはむしろきわめて付合いやすい、後くされのない人たちばかりなのだ。ところが、[5]善人のゲームにはルールがない。どこから飛んでくるかわからぬ一撃を、絶えずぼくは恟々（きょうきょう）としておそれていなければならぬのである。

その意味からいえば、ぼくは聡明な悪人こそは地の塩であり、世の宝であるとさえ信じている。狡知（こうち）とか、奸知（かんち）とか、権謀とか、術数とかは、およそ世の道学的価値観念からしては評判の悪いものであるが、むしろぼくはこれらマキアベリズムの名とともに連想される一切の観念は、それによって欺かれる愚かな善人さえいなくなれば、すべてこれ得難い美徳だとさえ思っているのだが、どうだろうか。

友情というものがある。一応常識では、人間相互の深い尊敬によってのみ成立し、永続するもののように説かれているが、年来ぼくは深い疑いをもっている。むしろ正直なところ真の友情とは、相互間の正しい軽蔑（けいべつ）の上においてこそ、はじめて永続性をもつものではないのだろうか。

「世にも美しい相互間の崇敬によって結ばれた」といわれるニーチェとワーグナーの友情が、僅々（きんきん）数年にしてはやくも無残な破綻（はたん）を見たということも、ぼくにはむしろ最初からの当然結果だとさえ思えるのだ。伯牙（はくが）に対する鍾子期（しょうしき）の伝説的友情が、[6]前者の人間全体に対するそれではなく、単に琴における伯牙の技に対する知音としてだけで伝えられているのは幸いである。伯牙という奴は馬鹿であるが、あの琴の技だけはなんとしても絶品だという、もしそうした根拠の上にあの友情が成立していたのであれば、[7]ぼくなどむしろほとんど考えられる限りの理想的な友情だったのではないかとの思いがする。

友情とは、相手の人間に対する九分の侮蔑と、その侮蔑をもってしてすら、なおかつ磨消し切れぬ残る一分に対するどうにもならぬ畏敬（いけい）と、この両者の配合の上に成立する時においてこそ、最も永続性の可能があるのではあるまいか。十分に対する

ベタ惚(ぼ)れ的盲目友情こそ、まことにもって禍(わざわい)なるかな、である。

金はいらぬ、名誉はいらぬ、自分はただ無欲でしてと、こんな大それた言葉を軽々しく口にできる人間ほど、ぼくをしてアクビを催させる存在はない。

それに反して、金が好きで、女が好きで、名誉心が強くて、利得になることならなんでもする、という人たちほど、ぼくは付合いやすい人間を知らぬのだ。第一、サバサバしていて気持がよい。安心して付き合える。金が好きでも、ぼくに金さえなければ取られる心配はないし、女が好きでも、ぼくが男である限り迷惑を蒙(こうむ)るおそれはない。名誉心が強ければ、どこかよそでそれを摑(つか)んでくれればよいのだし、[8]利得になることならどんなことでもするといっても、ぼくに利権さえなければ一切は風馬牛である。これならば常に淡々として、君子の交りができるからである。

[9]金がいらぬという男は怖ろしい。名誉がいらぬという男も怖ろしい。無私、無欲、滅私奉公などという人間にいたっては、ぼくは逸早(いちはや)くおぞ気をふるって、厳重な警戒を怠らぬようにしてきている。いいかえれば、この種の人間は何をしでかすかわからぬからである。しかも情ないことに、そうした警戒をしておいて、後になってよかったと思うことはあっても、後悔したなどということは一度もない。

[10]近来のぼくは偽善者として悪名高いそうである。だが、もしさいわいにしてそれが真実ならば、ぼくは非常に嬉しいと思っている。ぼく年来の念願だった偽善修業も、ようやく齢(よわい)知命に近づいて、ほぼそこまで到達しえたかと思うと、いささかもって嬉しいのである。

景岳橋本左内でないが、ぼくもまた十五にして稚心を去ることを念願とした。そしてさらに二十代以来は、いかにして偽善者となり、いかにして悪人となるかに、苦心修業に努めて来たからである。それにもかかわらず、ぼく自身では今日なお時に、無意識に、ぼくの純情や善意がぼくを裏切り、思わぬぶざまな道化踊りを演じるのを、修業の未熟と密(ひそ)かに深く恥じるところだっただけに、この定評、いささかぼくを満足させてくれるのだ。

もっとも、これはなにもぼくだけが一人悪人となり、偽善者たることを念願するのではない。ぼくはむしろ世上一人でも多

くの聡明なる悪人、偽善者の増加することを、どれだけ希求しているかしれぬのである。理想をいえば、もしこの世界に一人として善意の善人はいなくなり、一人の純情の成人小児もいなくなれば、人生はどんなに楽しいものであろうか、考えるだけでも胸のときめきを覚えるのだ。その時こそは誰一人、不当、不法なルール外の迷惑を蒙るものはなく、すべて整然たるルールをまもるフェアプレーのみの行われる世界となるだろうからである。

11 されば世のすべての悪人と偽善者との上に祝福あれ！

（中野好夫「悪人礼賛」）

〈注〉 一揖…お辞儀をすること。

オセロ、イアゴー…ともにシェイクスピアの戯曲『オセロ』の登場人物。

橋本左内…一八三四～一八五九、幕末の志士。

問一 傍線部1は、どのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 悪人は、聡明なので、無軌道な本質が出ないように接してくる。

b 悪人は、グラマーというべきものを持っているので、予想をはずしたことをしかけてこない。

c 悪人は、悪のグラマーを持っているので、理路整然たる対応をする。

d 悪人は、相手の変化に敏感なので、相手に不快な態度をとらない。

問二　傍線部2について、「善意、純情の犯す悪」に相当するものを、次の中から一つ選べ。

a　他人に迷惑をかけても、そしらぬ振りをすること。

b　自分の行動の基点に善意があることを、免罪符としていること。

c　相手にとがめられると、その相手が純情でないとなじること。

d　相手の持つ純情を、自分のものと錯覚すること。

問三　傍線部3「奇怪な義務」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　不当な迷惑を受けたにもかかわらず、相手が主張する善意に感謝しなければならない状況に陥ること。

b　不当な迷惑を受けたにもかかわらず、相手の純情に同情して同意してしまうこと。

c　不当な被害を受けたにもかかわらず、相手の弁明の激しさに驚いて許容する態度を示してしまうこと。

d　不当な被害を受けたにもかかわらず、相手の目論見に乗ってしまって我慢すること。

問四　傍線部4「驚くべき錦の御旗なのだ」とは、どのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　驚天動地の権威主義的な言動であるということ。

b　恐るべき恫喝（どうかつ）であるということ。

c　驚嘆すべき大義名分であるということ。

d　恐怖を与える行為であるということ。

問五　傍線部5について、「善人のゲームにはルールがない」ことによってどのようなことが起こるのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　相手が規範から自由なので、率直に付き合えること。

b　相手に確固たる信念がないので、不安に陥れられること。

c　相手がどこから攻撃してくるかわからないので、びくびくすること。

d　相手が寛容であるので、前もって警戒しないで対応できること。

問六　傍線部6は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　伯牙の全人格を評価したのではなく、伯牙の琴の技術を評価したものとして伝わっているのは、筆者にとって嬉しいことである、ということ。

b　伯牙の人間全体については価値を保留し、伯牙の琴の技術のみを評価したと伝わっているのは、事実の点においてよかった、ということ。

c　伯牙の全人格を評価し、それを伯牙の琴の才能に象徴させて伝えたのは、優れた伝え方である、ということ。

d　伯牙の人間全体については全く評価しないにもかかわらず、伯牙の琴の才能だけは伝わったということは、伯牙にとって幸福なことである、ということ。

問七　傍線部7について、「理想的な友情」とは、どのような友情か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人間相互の深い尊敬の上に成り立つ友情。

b　互いに相手を軽蔑し合った上で成り立つ友情。

c　相手の優れた点を認め合った上で成り立つ友情。

d　互いに全身全霊を込めて付き合うことで成り立つ友情。

問八　傍線部8について、「風馬牛である」とは、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　無に帰すこと

b　つじつまが合わないこと

c　無関係であること

d　色あせて見えること

問九　傍線部9「金がいらぬという男は怖ろしい」と筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　このような男は、予測不能なことをする恐れがあるから。

b　このような男は、偽善者であることが多いから。

c　このような男は、いざというときに泣きついてくるから。

d　このような男は、自己明視する能力に欠けていることが多いから。

問十　傍線部10について、筆者が「近来のぼくは偽善者として悪名高い」ということを「嬉しい」と思うのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　悪人を評価し、自らも悪人になることを夢みてきたが、偽善者と呼ばれてそれがお世辞でないと確信したから。

b　偽善者になる修業も、知命に近づいていよいよ実る予感がしたから。

c　善人の要素をふるい落とすべく修業を重ねてきて、ようやく橋本左内の境地に近づいてきたと思ったから。

d　偽善者になるために修業しているが、まだ時に純情や善意が出てしまい、未熟さを感じていたから。

問十一　傍線部11について、このように筆者が祈るのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　生活の円滑に障害をもたらす善人を一掃することで、世の中が平和になるから。

b　悪人と偽善者ばかりの世の中になることで、筆者の主張が実現されるから。

c　この世のなかで、不当な迷惑を受ける者がいなくなるから。

d　自分ひとりが悪人・偽善者になれても、それでは自己満足にすぎないから。

二

次の国木田独歩による文章を読んで、後の問に答えよ。

およそ社会において最も恐怖すべく、最も悪むべくして最もその表面の美なる者は何ぞや。金融の渋滞は経済社会の怖るべき事なるべし。模倣主義は随分文学社会において悪むべく、しかも表面の美なる者なるべし。ダイナマイトの飛来は政治界において甚だ戦慄すべき事なるべし。然れどもアンビション（　X　）ある人間、また人間のアンビション程、恐怖すべく、悪むべく、しかもその外面の如何にも燦爛として能く社会の目を欺く者は非ざるなり。

吾国はすでに代議政の国なり。言はば、筆戦舌争の中よりして美政を得んと欲する国なり。この時に当つてもつとも怖るべき最も悪むべき者は何ぞや。口頭泡を飛すの雄弁も、則ちバルクの如き雄弁もヘスチングの口に発せば如何、筆勢声あるのユーゴーの如き名文も三世ナポレヲンの手に成らば如何。[1]余はこれらの名文のその雄弁名文なる程、益々恐るべく悪むべき者なるを知るなり。

およそこれらアンビションなる者は多くは[2]歴史、伝記の変読より生ずべきなり。古の英雄豪傑が為し得たる赫々の功名を読み聞きてムラムラと胸中に起る煩悩なり。一片の良心閃めくありて始めて為し得たる事業たるを知らず、幾多公義の涙、幾多正大の叫び、これを助くる有つて漸く成就したる功名たるを看ず、ただその表面の光彩に垂唾し、また無眼の歴史伝記者が偽功名、偽事業たるを知らずして、[3]虎心狼体を掩ふに英雄豪傑を以てしたるを看破する能はず、ひたすらその香しき文字に迷ひ、遂に「吾も人なり彼も」てふ賭場にその一足を投ぐる者なり。看よ、これすでにアンビションに動く、すでに己自身の為めにのみ働く。その言ふ事、その為す事、恐るべきに非らざるか。

然るに近頃吾が政治社会を顧みるに実に痛嘆憂慮措く能はざる者あり。[4]余かつて維新大変革の歴史を読む。内に公武間の猜忌憎悪あり。外に外交危難の益々迫るあり。これに加ふるに諸侯その説を異にし、強藩その威を逞しうし、吾国の運命はまさに孤城落日と評せんよりむしろ炎々錯騒の中にいつしか消えさらんとする大火事の如くなりたり。為めに血涙悲憤の士は処々に起り、骨砕け肉破るるも誓つて神洲の為めに尽力奔走せんとし、献身犠牲となつて少しも恨みず、懼れず、その神気の潔白

純粋なる、読み来り読み去る内、思はず人をして奮起せしむ。しかし一方より見る時は、この大変革は幾多の蛟龍に与へたる風雲となり、叱咤直ちにアンビションを達せんと欲する者またその数甚だ多し。今日の日本もとより維新時代の日本にあらず。然れども、外に条約改正の未だその局を結ばざるあり、内には未だ立憲政体の実相実効を見ざるあり。茫々千里功名事業の野は最も日本の前途に横はるなり。[5]とてもかくても一転化を経ざるを得ざる運命の日本なり。嗚呼一方に維新の功名を見、一方に欧洲十九世紀の政治家政略家が為したる赫々の名に酔へる、今日在野有為の士はその胸中に一種の己れ自らさへ明白に認め得ざる煩悩は起らざるか。余は今日実に凛烈潔白の士あるを知るなり。然れども近頃の政略を観測し、彼の党派の激烈なる争ひを見、彼の無分別の暴動を見、虚心平気、これを分析すれば、彼等が体面は如何にも真らしく見ゆれども、その中に無数のアンビション宿らざるか、余疑なき能はざるなり。

[6]条約改正は真に吾国に与へたる一箇の坩堝なるかな。これが為叫ぶあり、冷笑するあり、無頓着なるあり、駈引するあり。しかして遂にダイナマイトを投ずる者さへありたり。然れどもこれただ表面に現はれたる、叫び、冷笑、無頓着、駈引、ダイナマイト、のみ。その真相は果して如何、鍍金の指輪は坩堝に投ぜられてはその偽物なることを現はすなり。条約改正問題の坩堝が吾々に与へたる真相は如何……余は痛嘆なき能はざるなり。

殊に余をして憂ひしむる者は吾が俊邁有為の青年諸子が同じくこのアンビションの潮流に巻込まるることこれなり。青年諸子は二十世紀の日本帝国史中に、野望、詐欺、軋轢、騒乱の益々多からむことを望むか。正義、公明、厳粛、壮大の益々繁からむことを欲せざるか。欧洲十九世紀のアンビション界を以て吾が二十世紀日本に移植せしめんと思ふか。今日の野望界を破砕し、放逐し、正々堂々の光明界を開くに暇なきか。

嗚呼先進アンビションの為めに動き、後進アンビションの為めに動く。今後数十年の日本社会は果して如何ならむ。余は憂慮なき能はざるなり。

〈注〉 バルク…エドマンド・バーク。イギリスの政治家・政治理論家。　ヘスチング…ウォーレン・ヘスティングス。イギリ

スの初代ベンガル総督。インドにおけるその独裁的支配は本国で批判を受けた。バークも批判をしたうちの一人。
ユーゴー…ヴィクトル・ユーゴー。フランスの詩人・劇作家・小説家。　神洲…日本のこと。　蛟龍…時運にめぐりあわず、実力を発揮できないでいる英雄・豪傑。

問一　傍線部1のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　口角泡を飛ばす雄弁は、自身の功名のために社会の目を欺く意図を常に内包するものだから。

b　ユーゴーのような名文も、その本質を理解しないナポレオン三世の手にかかれば、価値が著しく損なわれるから。

c　代議政体の国家においては、雄弁・名文をもって理想の政治を語る必要があるが、それも度が過ぎると、いたずらに混乱を招くだけとなるから。

d　雄弁・名文も、それを操る人間の自己実現のために使われるなら、聞く者、読む者たちを誤った方向に導いてしまうから。

問二　傍線部2は、どのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　歴史的事実やその人物の事業を、自身の興味に引きつけ、世間とは違った独自の形で読みとってしまうこと。

b　過去の人物が成し遂げた功名から、学ぶべき点をより分けて読みとっていくこと。

c　歴史書や伝記の記載には偽りがあるということを、予め覚悟して読みとっていくこと。

d　歴史や伝記の背景にあるその人物の良心やその援助者の存在を見ずに、単にその成功譚（たん）のみを読みとること。

問三　傍線部3は、どのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　過去の英雄の行為にも、実際には失敗があったということ。

b　本物の功名や事業を行った例として、英雄豪傑の事跡を借りること。

c　どう猛で貪欲な性質を英雄的なふるまいによって覆い隠していること。

d　歴史家や伝記作家が自分の能力の無さを隠すために英雄豪傑に頼ること。

問四　傍線部4において、筆者が「維新大変革の歴史」から読みとったことは何か。次の中から適切なものを二つ選べ。

a　明治維新前には、外国の圧力があったため、公家と武士の間でなかなか意見の一致を見なかったということ。

b　幕末に日本が危機的な状況に陥った際、純粋な気持ちから、自分を犠牲にしても日本を救おうと働いた者たちがいたということ。

c　維新前後の混乱に乗じて、自己実現をはかろうとした者が多くいたということ。

d　幕末の志士たちが当時の政治に悲憤を抱き、日本を救うために奔走したのも、それまで彼等が活躍の場を得ることができない状況にあったためであるということ。

e　維新の大改革も、現在の状況の中では単なる過去の事跡となってしまっているということ。

問五　傍線部5はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　海外からの圧力はますます強まり、明治維新に匹敵する改革を改めて行わなければならない状況である。

b　外国との条約改正や立憲政治の実効的な運用など、さらに改革を進めなければならない事項が山積している。

c　立憲政体も有効に機能せず、新たな体制を画策する人間もおり、変化は免れない局面にある。

d　明治維新の成功を忘れ、西洋風の政治体制を無批判に受け入れかねない風潮がある。

問六　傍線部6について、以下のA・Bに答えよ。

A　「坩堝」とはここではどのような働きをするものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　表面的な立場の違いを取り去るもの。

b　紛糾した事態を乗り越える試練となるもの。

c　日本を危機的な状況に陥れるもの。

d　今後の政局を流動化させるもの。

B　筆者はこの「坩堝」により何が明らかになると考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　条約改正の問題が、実は本質的な政治問題ではないことが、時間をかけながら明らかになる。

b　人々が条約改正の問題に、日本の将来のために取り組むか、個人的な功名のために取り組むかが明らかになる。

c　日本の将来にとって憂慮すべき条約改正の問題が、今後どのような影響を与えるかが明らかになる。

d　これから世に出る青年たちが否応なくそこに巻き込まれ、立場の選択を迫られる状況が明らかになる。

問七　[X]に入る語句としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　正義　　b　大志　　c　自立　　d　野望

問八　次の文章の中から、本文の趣旨と合致するものを二つ選べ。

a　条約改正の問題で政治的に混乱している状況だからこそ、若者はあえて大きな野望を持ってそのために働くべきだ。

b　「アンビション」のために動くことは、一見、己自身の欲得で動いているように見えるが、最終的には理想の実現につながると言える。

c　条約改正をめぐり、昨今の政治家はいかにも正論を述べているように見えるが、その下には彼らの野心が隠れている疑いが大いにある。

d　次代の日本を背負う有能な若者たちには、野心の実現のためではなく、正義の実現のために立ち上がってほしい。

e　十九世紀の欧州においては、政治家はそれぞれの信条に従ってどう行動するかを決したが、現在の日本の政治家は、世の中の動きに流されるばかりで、日本の未来は憂慮せざるをえない状況である。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私たち人間は、どのようにして自分のことば(母語)をおぼえたのか、あまり記憶がない。日常生活からかけ離れたむつかしい語彙や、最近どんどん現われて来る新語などは、たとえば、はじめて聞いたのが誰からだったのか、どの新聞に出ていたかと、最初の出会いをおぼえているが、ここではそれぞれの言語に悠久の過去からそなわっていて、まるで水や空気のように当然と思われている語彙について考えてみよう。

こうしたことばは子どもの時から、いつの間にかおぼえて知っているので、テ、アシ、メ、クチ、ソラ、アメ……などのことばが、なぜそのようになっているのかと問うたりはしないし、どんなに批判精神の強い革命家でも、我々がアシと呼んでいるものを指すのにアシというオトをあてはめるのは不合理だから[1]取り換えようなどとは言わない。

今は単語について述べたが、文法についても同じようなことが言える。たとえば、「ラレ」がなぜ受身の意味を表わさなければならないのか。皆が皆こういう疑問を出しはじめたら、世の中の歯車はまわって行かない。だから、ことばのことをこせこせとあげつらう人は、少し頭が変か、世の中の和を乱す困った人だということになる。[2]言語が集団を決める最も強力なめじるしになるわけは、このことからもよくわかる。ことばがそのようになっていることに異議を申したてる人はまずいないからだ。

そうであるのに、[3]日本語は美しいことばだなどという。私たちはソラとかアオイとかのオトを、熟慮の上で、美しいからと言って選んだのではない。まだもの心つかぬうちに、無理やり、社会の暴力によっておぼえさせられたにすぎない。暴力というのは決して誇張ではない。選択の余地がなく、それを受け入れないと生存もむつかしいからだ。こういう個人がただただ受け入れるしかない社会のシステムを、ソシュールは「社会的事実」と呼び、言語は社会的事実の中でも最も強力な圧力を及ぼすものだと述べたのである。[4]社会的事実――つまり、その社会を成り立たせている個々人の意志をこえて、その上に君臨するシステムである。すでに述べたようにソシュールはこの語を同時代のフランスの社会学者、エミール・デュルケームから借りて

きたことはよく知られている。

ことばはこうして、誕生の瞬間から人間をしばりつける。その子が長じて、自分は日本語をすてて、英語をしゃべる人間になりたいと思っても、もうことばの取り換えはできない。どんなことばの才に恵まれている人間でも、十二歳をすぎると、母語を獲得したようなぐあいには他の言語を身につけることはできないのである。

こうして一度身につけたことばは、批判せずに、ただ美しいと言って讃美することが世間にうまく受け入れられる方法である。しかし、このような、さめた言い方は、実態に反する。[5]アシがアシでメがメであることは、誰にとっても、必然で自明のことであるだけでなく、絶対に正しいのである。

しかしよく考えてみれば、メがメであるのは必然の関係、つまり、何かわけがあってそうなっているのではない。メという単語は、メというモノ(もっと厳密に言うと、メそのものではなく、それから得られた概念)と、メというオトとが結びついてできている。そして、この指されるモノと、それを指し示すオトとの間には、必然の関係はなく、言語ごとに随意にきまっているということを、ソシュールは「記号の恣意性」と呼んだのである。このような[6]「恣意性」の原理は、個々の記号のみならず、「分節」をはじめ、言語のすべての領域に及んでいるので、この原理の重要性ははかり知れないのである。

現代世界では、多くの人が何か一つの外国語にふれていて、言語ごとに単語がちがうということを経験から知っているから、この「記号の恣意性」は説明されるとすぐにわかるが、それが、言語というものの全体にどのようなかかわりを持っているかについては、もう少し深く考えてみなければならない。

古代の人だけでなく現代人もまた、こうした説明を受ければわかるはずだが、まだまだ、モノとことば(オト)とはイコールで、ことばを出せばモノが呼び出されるという、コトダマ(言霊)的な感覚をもっている。人は忘れられない人を心の中に呼び出そうとして、その名(オト)をひそかに口にするのもそうした感覚の現われであるが、名は決して、その人の本質を表わしているのではなく、もとをただせば憎むべきかもしれないその親が与えたものである。

(田中克彦『言語学とは何か』)

〈注〉ソシュール…スイスの言語学者。一八五七年～一九一三年。
エミール・デュルケーム…フランスの社会学者。一八五八年～一九一七年。

問一　傍線部1「取り換えようなどとは言わない」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　様々な語彙や表現が否応なく自然に受け入れられ使用されることで、ことばは既に生活に密着しているから。
b　ことばは、どんな語彙や表現でも、それ自体としての合理性が保たれており、生活を支えているから。
c　悠久の過去から続いたことばの歴史がある以上、語彙や表現の交換は、簡単にはできないから。
d　ことばは水や空気のようにその存在に全く気づかれない以上、語彙や表現の交換はそもそも不可能であるから。

問二　傍線部2「言語が集団を決める最も強力なめじるしになる」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　様々な文化的な条件の中で、言語は民族や国や宗教といった各々の集団の個性的性質を別々に決定するから。
b　様々な文化的な条件の中で、言語ほど集団を拘束しながら、集団が従属するものは、他にないから。
c　言語の本質は、世の中の集団の和をみださないことにあり、これゆえに誰も異議申し立てしないから。
d　言語の本質は、世の中の歯車が回るように合理性をもっており、これゆえに合理的な集団を決定するから。

問三　傍線部3「日本語は美しいことばだ」とあるが、これを言う人はどのような立場に立っているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　日本語には、和をみださない美点をもつ集団をつくりだす力があることを熟慮した結果、主張する立場。

b　あたかも熟慮の結果、客観的に美しいと判断したかのような態度をとりつつ、実は主観的に美しいと感じている立場。

c　日本語には、日本人の集団を決定するほどの美しさが備わっていることを心から信じている人の立場。

d　あたかも、多くの言語を比較しながら判断したかのような態度をとりつつ、実は無批判に称賛する立場。

問四　傍線部4「社会的事実」とあるが、本文中の「社会的事実」の内容に一致しないものはどれか。次の中から一つ選べ。

a　言語は、もの心つかぬうちに無理やり習得させられるのであるから、まさに社会を脅かす暴力と言っても決して誇張ではない。

b　いったん言語が誕生すると、人間はその言語の暴力的な支配を受け、言語によってしばりつけられた状態がつづくことになる。

c　言語は個々の人の意志で左右できるものではなく、社会を支配する王のごとき力をもった存在であると言わねばならない。

d　いったん言語を習得してしまったら、その言語は母語となってしまい、他の言語を母語のように習得することは決してできない。

問五　傍線部5について「アシがアシでメがメである」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　アシという事物がアシという音声を指し、メという事物がメという音声を指すのに理由があること。

b　アシという音声はメではなくアシという音声をもち、メという音声もアシではなくメという音声をもつこと。

c　アシはアシ以外の何物でもなく、メもまたメ以外の何物でもないことが必然的であること。

d　アシという音声がアシという事物と、メという音声がメという事物と必然的に結びついていること。

問六　傍線部6〈「恣意性」の原理〉とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　オトは、それがモノを指し示すときに、必ずそのモノでならなければならないような理由をもっている。

b　モノは、それがオトと結びつくときに、必然的な関係をもたせないような言語の領域に及んでいる。

c　オトは、それがモノを指し示すときに、必ずそのオトでならなければならないような理由をもたない。

d　モノは、それがオトと結びつくときに、言語ごとに理由があって決まる随意性に従うものである。

問七　傍線部6〈「恣意性」の原理〉についての例として適切なものを、次の中から一つ選べ。

a　日本語のリンゴという発音は、ある果物を意味しているが、同時にアップルという発音も日本語になっている。

b　日本語のリンゴという発音と英語のアップルという発音は、別の言語でありながら、ある同じ果物を意味している。

c　英語でアップルと発音されることばの意味は、必ずしも日本語のリンゴという発音の意味と同じとは限らない。

d　英語でアップルと発音されることばの意味が、随意的に日本語のリンゴの発音の意味とは異なるものとされる。

問八　本文の内容と一致しているものはどれか。次の中から二つ選べ。

a　親は子供の名前を自由につけるのであって、それ故に、子供の名前はただの名前に過ぎず、決して子供自身の本質を表すものにはならない。

b　記号の恣意性は記号の必然性の考え方を否定する言語の事実であるが、忘れられない人の名前を呼んでしまう感覚と同様にはかりしれない重要性をもつ。

c　モノとオトは常に同じものであり、オトを出せばモノが直ちに現れるという考えは、名前とその本質が恣意的に結合することを表している。

d　親は子供の名前を自分勝手につけた結果、子供は親を憎むべきものとみる可能性が大きく、そのために子供の名前も本質を表さないことになる。

e　記号の恣意性は記号の必然性の考え方を否定する言語の事実であるが、この事実に反して、人はモノとオトとがイコールであると思い描きがちである。

f　モノとオトとは常に無関係であり、オトを出してもモノが直ちに現れるとは限らないという考えは、名前によって表された本質をよく説明している。